

J・ヴァイアー『悪魔の眩惑』

—魔女は罪人か、病人か?—

菊地英里香

はじめに

悪魔学とは、魔術と魔女裁判の議論に根拠を与えるためだけの学問ではない。それは自然や超自然、神や悪魔や人間などに関わるさまざまな事象についての考察を含んだ幅の広い言説である。悪魔や魔女をめぐる論争の歴史は古く、無数の神学者、法律家、医者たちがこれらのテーマについて論じてきた。ヨーロッパで魔女狩りが概して最も激しかったのは16、17世紀のことであるが、当時においても魔女や悪魔をめぐる活発な議論が交わされていた。ヨハン・ヴァイアー（1515–1588）は、『悪魔の眩惑と魔術師と毒殺者について』*De praestigiis daemonorum et incantationibus et veneficiis*¹の中で、メランコリーという医学概念を魔女の問題に持ち込み、魔女とされた女性たちに責任能力がないことを説いた人物である。このような見解を表明した彼に対しては賛否両論があったが、批判の声の方がきわめて強く、本稿でとりあげるトマス・エラストゥス（1523/24–1583）やジャン・ボダン（1529/30–1596）、そしてジェームズ1世（1566–1625）をはじめとする魔女狩りの正当性を訴える同時代の理論家たちから批判が相次いだ。

しかし、魔女狩りに医学的かつ人道的見地から抗議した正義の人として、同時に近代精神医学の先駆者として、ヴァイアーは19世紀以降高く評価されることとなる。優れた精神医学史家であったG・ジルボーグはヴァイアーを評して、「現代精神医学の真の創始者、人間科学における真の改革的天才としてぬきんでている」²と述べた。またアナルの歴史家R・マンドルーも、「フランスでの魔女裁判の続行に終止符を打つことになる——もっと後の善き時代のことだが——大規模な論戦に際しもしその出発点を定めるべきなら、それは『悪魔の眩惑と魔術師と毒殺者について』が出版された

¹今回ヴァイアーのテキストには以下のフランス語版を用いた。J.Wier, *Histoire, disputes et discours des illusions et impostures des diables, des magiciens infames, sorcieres et empoisonneurs: Des ensorcelez et demoniaques et de la guerison d'iceux: item de la punition que meritent les magiciens, les magiciens, les empoisonneurs et les sorciers* (Le tout compris en six livres), Paris, 1885, 2 vol. (réimpression de l'édition de 1579), New York, Arno Press, 1976.

² G・ジルボーグ『医学的心理学史』神谷美恵子訳、みすず書房、1958年、p.161。（原著の出版は1941年。）

時点だ」³と記述した。だが、このようなヴァイアーへの賞賛がある一方で、彼に対し批判的な見解を示す研究者もいる。例えば、悪魔が強大な力を持っていることを認めてしまったために、魔術を可能な現象というよりはむしろ実在する現象にしてしまっているとS・アングロは述べている⁴。この議論をさらに進めて、魔女狩りを鎮めようとした彼の意図とは裏腹に、結果的には魔女狩り熱を煽ることになったと指摘するL・エステスのような研究者もいる⁵。

このような批判の声はあるものの、ヒポクラテス、ガレノスという古代医学がまだ権威をもっていた当時において、医者としての観察や臨床に基づいて魔女の問題に取り組んだヴァイアーの姿勢は十分評価に値する。とはいえ、魔女狩りが猛威をふるった迷妄と誤謬の時代に魔女を救おうとした英雄、あるいは現在から過去を振り返る視点から、生まれてくるのが早すぎた現代的感覚をもった医者としてヴァイアーを賞賛することに終始すべきではない。先の批判も考慮に入れながら、当時のコンテクストの中でメランコリーを中心に、彼の理論の特徴とその限界を検討しなおしてみたい。

また、比較の対象として、魔女に関してヴァイアーとはまったく見解の異なるエラストゥスの『2つの対話』（『悪魔の眩惑』の1579年のフランス語版に収録された）についても考察を行うことにする。このフランス語版の翻訳者であるシモン・グラールは、巻頭にかかげられた読者への挨拶の中で、この2つの作品が「我々の時代に魔女に味方して、あるいは反対して他の人々が書いたことすべてを含んでいる」と述べ、この問題に関する自分の見解を述べることは差し控えると言った後で、「この2つの弁論に関する判断は読者に委ねよう」と書いている⁶。このグラールの提案に従って、2人の医者によるまったく対照的な2作品それぞれの議論を検討することで、文化史的な視点から魔女の問題にアプローチしてみたい。また、この問題は医学、法学、神学がクロスオーバーする繊細な領域に属するものでもある。この点にも注意する必要がある

³ R.Mandrou, *Magistrats et sorciers en France au XVII^e siècle. Une analyse de psychologie historique*, Paris, Seuil, 1980, p.127.

⁴ 例えば, S.Anglo, "Melancholia and Witchcraft : debate between Wier, Bodin, and Scot ", *Folie et deraison à la Renaissance*, 1976, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles, pp.208-228 など. なおこの点に関しては, ミデルフォートが簡潔に紹介している. H.C.E.Midelfort, "Jean Weyer and the Transformation of the Insanity Defence", *The German People and the Reformation*, ed. R.Po-chia Hsia, Ithaca: Cornell University Press, 1988, p.237.

⁵ L.Estes, "The Medical Origins of the European Witchcraft", *Journal of Social History* vol.17, 1983, pp.271-84.

⁶ J.Weyer, *op.cit.*, vol.1, pp. VLI-III-XLVIII.

あるだろう。

1 『悪魔の眩惑』について

1.1 概要

ヨハン・ヴァイアーは、ムーズ河畔のグラールヴ（オランダ）に生まれ、1550年から1578年までの28年間に渡り、グラールヴ公爵の主治医を務めていた人物である⁷。彼は、ドイツでの修行時代（14—18歳の頃）に、コルネリウス・アグリッパ（1486—1535）に師事し、その後はパリ、続いてオルレアンで医学を学んだ。『悪魔の眩惑』は、彼が魔女裁判に抗して著した5つの書からなる作品であり、1563年にバーゼルで出版された。その後1568年までにラテン語版は3度版を重ね、1577年には第6の書を加えた増補版が出版された。フランス語の出版は、医師ジャック・グレヴァンにより1567年になされ、1569年に再版された。さらに、1579年には第6の書とトマス・エラストゥスによる『二つの対話』を加えた翻訳がグラールによってなされた⁸。

まず『悪魔の眩惑』の内容について、簡単に触れておくことにする。本書は6つの書からなる大著である。まず、第1の書では悪魔について述べている。具体的には、悪魔の誕生、悪魔の目的やその能力について著述され、古典や神学の著作の中に現れる悪しき霊や悪魔の所業が列挙されている。もちろん、悪魔の力は「神の許しの下で」しか発揮されることはない⁹。次の第2の書では、悪魔に隷従した者たちであるおぞましい魔術師たち *magisiens infames*¹⁰ について書いている。彼らは、悪魔の力をかりてさまざまなことを行い、自分自身の悪意とあらゆる欺瞞とさまざまな占いをを用いて他人をだまし、医学の崇高な教えを悪魔的なペテンによって汚す者たちであるとされた。第3の書では、魔女たち *Sorcières*（原語は *Lamiae*）について述べている。「私は、第3の書で魔術師と魔女を区別するつもりだ」とヴァイアーは断言する。「魔女たちは（彼女たちの性別のために）不安定で信仰において揺らぎやすく、年のわりにその

⁷ ヴァイアーの生涯と著作に関しては、Johann Weyer, *Witches, Devils and Doctors in the Renaissance (De Præstigiis dæmonum)*, translated in English from Latin edition (1583) by John Shea, New York, Center of Medical and Early Renaissance Studies, vol.73, 1991, pp.XXVII-XCIIが詳しい。また、G.ジルボーグの前掲書も参考になる。

⁸ R.Mandrou, *op.cit.*, p.128.

⁹ 悪魔は神の配下の「死刑執行人」であり、神の許しがなければハエ1匹生じさせることもできないと言われている。J.Weyer, *op.cit.*, vol.1, I -14, p.146.

¹⁰ 表記はテキストのままである。

精神は十分に思慮深いとは言えず、それだけいっそう悪魔の欺瞞にかかりやすい者たちであるとされた。それゆえ、悪魔は彼女たちにうまく取り入り、——彼女たちがメランコリーの病に侵されている場合は特に——、彼女たちの想像をかき乱す。魔女たちは本も読まなければエクソシズムや何らかの文字を使うようなこともしないので、たいていは博学で思慮深く、好奇心をあわせ持ち、しばしば魔術の技を学ぶために長期の旅をする魔術師たちといかに彼女らが異なっているかは明白だとヴァイアーは述べた。また、彼女たちを「口から毒を与える、あるいはどこかに毒を隠して相手がそれを吸って死ぬように仕向ける」毒殺者たちと区別しなければならないということも言われる。「おぞましい魔術師、魔女、毒殺者のあいだには大きな違いがある」ということを論証するのが第3の書、さらには『悪魔の眩惑』全体にとっても大きなテーマとなっている。第4の書では、魔女とその術によって苦しめられていると考えられている者たちと悪魔憑きについて述べている。これらの現象は、魔女や他の人間たちの協力なしに、犠牲者たちが秘された神の許しの下で、悪魔によって苦しめられたり取り憑かれたりしていることによって起きているとヴァイアーは断言する。第5の書では、魔術にかけられたと考えられた人々と悪魔憑きの者たちの治療について書いている。この方法はこれまでなされてきた方法とまったく異なっているとヴァイアーは言い、魔よけの札や呪文、首輪や指輪といったものの使用は、悪魔がその支配を確立するために捏造した非合法的手段であるとして排除する¹¹。そして、そのかわりに医学の聖なる治療が正しく適応されるべきだと主張した。第6の書では、おぞましい魔術師たち、魔女たち、毒殺者たちへの罰について書いている。ここでは魔術師たちと毒殺者たちへの処罰は是認されるが、魔女たちはメランコリーに苛まれているだけで異端者ではなく、悪魔に誘惑されているだけなので彼女たちには刑罰ではなく治療を与えるべきだとされた。

1.2 先行研究における若干の争点

A 悪魔の力は実在するのか、比喩なのか？

¹¹ 魔術的効果を得るために言葉を用いることについては、エラストゥスも非難している。両者が非魔術的キリスト教に到達しようという願いをもっていたことを、D.P.ウォーカーは指摘する。D・P・ウォーカー『ルネサンスの魔術思想』田口清一訳、平凡社、1993年、p.180, p.189. この点に関しては、以下の著作でも触れられている。J-J.Bono, *The Word of God and the Languages of Man*, Wisconsin, The University of Wisconsin Press, 1995, pp.249-255.

アナールの歴史家J・ドリュモーが『恐怖心の歴史』の中で詳しく述べているように、16世紀と17世紀初頭はサタンに対する恐怖がヨーロッパで頂点に達していた時期である¹²。「暗闇の王者」の姿が西洋の想像界の中でこれほど重要性をもったことは決してなかったとも言われている¹³。ヴァイアーは『悪魔の眩惑』の第1の書において、悪魔について詳細に語っている。悪魔がその誕生以来、普遍的に強大な力を及ぼしてきたことや、神の許しの下で発揮される悪魔の能力について、聖書や古典、教父たちの言説などを活用するという同時代の悪魔学者たちが用いたのと同じ手法でヴァイアーは論証している。

テキストを読む限りでは、ヴァイアーは悪魔の存在とそのさまざまな能力を信じきっているように思われるのだが、現代の精神医学者ジルボーグは別の見解を示している。「はじめに」でも触れたジルボーグはヴァイアーに関して、「古い権威をうやうやしく受け入れて、これが役に立つときにはいつでもこれを利用するが、役に立たない時には丁寧にお辞儀をして自分自身の道を行くというのが彼の優れた特徴であつたらしい」と述べ、このような精神をもって彼が魔女の問題を扱っていると述べる¹⁴。ジルボーグによれば、「悪魔」という言葉はちょうど今日における「伝染病」とか「ヴィールス」のように、16世紀におけるひとつの通り言葉であり、それははっきりしないいくつかの概念をあらわし、また人々がその性質を知らない更に多くの自然界そのものをあらわしていたという¹⁵。ジルボーグ流に言うなら、悪魔に関して論じることは「丁寧なお辞儀」ということになろうか。

魔女狩りの研究者であるH・C・E・ミデルフォートの見解も、ジルボーグと同じ路線を行くものである。当時、悪魔的な驚異と考えられていた事柄すべてに関して、ヴァイアーは自分自身の経験から自然の原因を見つけていたが、聖書という権威に配慮しなければならなかったために、悪魔はもはや物質に作用する力を持っていないと結論付けることができなかつたとミデルフォートは述べた。彼によれば、ヴァイアーは魔術の本質が悪魔と人間との契約にあると考えていた（ヴァイアーはそれを無効だと考えている）。したがって、悪魔が実際に物質に作用する力をもつという事柄によって

¹² J.ドリュモー『恐怖心の歴史』永見文雄、西澤文昭訳、新評論、1997年、pp.446-454。（原著の出版は1978年。）

¹³ R.Muchembled, *Une Histoire du Diable*, Paris, Seuil, 2000, p.149.

¹⁴ G.ジルボーグ、前掲書、p.149.

¹⁵ 同書、p.150.

契約が決まるわけではないので、ヴァイアーは悪魔が強大な力を持っていることを容易に認めることができたこととミデルフォートは記している¹⁶。

悪魔の力を比喻あるいは建前とする見解がある一方で、『悪魔の眩惑』の英訳本を刊行したG・モラをはじめとする研究者たちは、ヴァイアーがはっきりと悪魔の力を信じていたと反論している¹⁷。アングロも、ヴァイアーにおける悪魔や悪霊は比喻ではなく、字義どおりそれぞれ悪魔、悪霊に他ならないと言い切っている。悪魔たちが異常な精神状態にある人々に取り入ることをヴァイアーは認め、悪魔たちが狼や他の動物たちのふりをして人間をだましたり、実際に人間と関わったりしていることを彼は『悪魔の眩惑』の随所で語っているが、アングロからすれば、ヴァイアーのこのような見解は「ありえないもの」だった。悪魔や悪霊たちが身体に影響を与えること、身体的に作用したり人間に働きかけたりすることは、人間のほうから同様に悪霊へアプローチすること（すなわち魔術的行為）がありうるという意見に対し十分に反論できないままであるとアングロは指摘する¹⁸。また、『悪魔の眩惑』の精緻な分析を行った平野隆文氏も当時の人々にとって、「魔女抜き」の悪魔を想定するのは、「魂抜き」の身体を想定するのと同じく全く不可能であったと述べている¹⁹。

ミデルフォートが言うように、悪魔の力を認めることはヴァイアー自身の中では矛盾を引き起こすものではなかったかもしれない。しかし、平野氏が指摘するように、悪魔の存在を認めることが自動的に魔女の存在も認めることになるという当時の常識からすると、悪魔の力は認めるがそれと結託する魔女は存在しないと主張することには、かなりの無理があったと考えられる。

B 魔術師には厳罰が要求されているのか、否か？

メランコリックな女性たちである魔女を悪魔のまやかしの犠牲者にすぎないとみなす一方で、悪魔の力を利用して自らの意志によって悪魔を呼び出す魔術師が存在することをヴァイアーは認めている。第6巻の第14章において、魔術師は死刑に処されるべきだという意見に賛成だとヴァイアーは書いた。この箇所を根拠に、『悪魔の眩惑』

¹⁶ H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, p.249.

¹⁷ G.Mora, *op.cit.*, p.419.

¹⁸ S.Anglo, *op.cit.*, p.213.

¹⁹ 平野隆文『魔女の法廷』岩波書店, 2004年, p.214.

は、誤って告発されている魔女たちへの憐れみに満ちている一方で、「男の魔女」すなわち魔術師に対してはこれまでの論者と同様に手厳しいとアングロは言い、さらに、この点がヴァイアーの啓蒙された人道主義者としての彼の名声の命取りになっているとも主張した²⁰。C.バクスターもヴァイアーのこの記述を拠り所にして、ヴァイアーもボダンと同様に魔術師への迫害を説いたとさえ言っている²¹。

果たして、彼らの言うとおりののだろうか。確かに、女性の魔女たちを救うために、魔女に向けられていた非難を男性の魔術師に転嫁してしまおうという思惑がヴァイアーの中にあつた可能性は否定できない。しかし、魔術師は死刑に処されるべきだという意見に賛成だと書いたのは、「丁寧なお辞儀」ではないかと筆者は考える。なぜなら、彼が積極的に魔術師の迫害を説いているはずがないということは、以下の点から証明できるように思われるからだ。

ミデルフォートは次のように述べている。ヴァイアーは第6の書において、毒やその他の方法で身体的に他人に危害を加えた者（すなわち毒殺者）にこそ死刑が値すると明言している。したがって、魔術師たちには異端と冒瀆の道を選んでいるという自覚があるだけに、老いた弱弱しい女性たちに比べれば非難に値するという程度のことであろう。ヴァイアーは、魔術師たちの冒瀆に対して怒りを表すこともあるが、概してその処刑を催促してはいない²²。

さらに、筆者は以下のように考察する。先に触れた魔術師を処刑することに賛意を示した文章の直後に、ヴァイアーはモーゼの時代に戒律で罰せられていた行為が現在では罰されなくなっていることを記している。たとえば、かつて偽証者には死刑が与えられ、処女でないことがわかった花嫁は石打ちの刑に処されていたが、現在ではこのような罰は和らげられているとヴァイアーは言う。このことは、ヴァイアーが魔術師たちへの処罰に対しても同様の考えを持っていたことを暗示しているのではないだ

²⁰ S.Anglo, *op.cit.*, p.213.

²¹ C.Baxter, Johann“Weyer’s De Praestigiis Daemonum: Unsystematic Psychopathology”, *The Damned art: essays in the literature of witchcraft*, ed.Sydney Anglo, Routledge & K.Paul, 1977, p.53.この点に関して、平野氏は「本当の妖術使い（オトコ魔女？）は、田舎の老婆たちの中にはなく、実は都会の知識人の中にこそ潜んでいる、だから、前者を苦しめるのはやめて、後者を厳しく取り締まれ、とでも言いたげに映るが、どうだろうか」（平野隆文、前掲書、pp.164-165年）と断言は避けている。なお歴史的には儀礼的魔術を行う高等魔術師たちへの迫害のほうが先に起こっている。この点に関しては、ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史』山本通訳、岩波書店、1983年、pp.221-242が詳しい。

²² H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, p.249.

ろうか。彼は、10人の罪人を逃す方が1人の無実の人間を罰するよりましだという考えを称賛してもいた²³。このような人物が魔術師への厳しい迫害を訴えているとは考えにくい。

また、悪霊たちとの秘めやかな提携によりさまざまな幻覚や亡霊をみせたり、不敬虔な呪文を用いてして人々の目をくらましたりするこの種の魔術師は無害であり、悪霊との交流を止めて悔い改め、正気に返るように忠告されるあるいは強制されるべきで、公共の福祉のためにせいぜい追放刑がふさわしいとヴァイアーは述べている²⁴。これこそがヴァイアーの本音であり、彼は魔術師への厳罰を望んでいたわけではないと推測できる。

1.3 悪魔との契約——法学的、神学的、医学的視座から——

悪魔と魔女の契約は、ヴァイアーが「仮想敵」²⁵としたシュプレンガーの『鉄槌』において魔術の核心とされていた重要な事柄であるが、ヴァイアーはこの契約を幻想に過ぎないと考えていた。ヴァイアーは悪魔との契約に関して、メランコリーの理論だけによってではなく、ローマ法の解釈によっても無効なものだと証明している。

ヴァイアーはローマ法と教会法に関して、広範囲にわたり専門的な言及を行っている。彼はユスティニアヌス、グラティアヌス、グレゴリウス9世などの膨大なテキストを自在に操ることができた。ヴァイアーは、注意深くあらゆる種類の契約を吟味し、以下のことを指摘した。まず、契約は「信義誠意」*bona fides*に基づいたものでなければならない、すなわち、重大な事柄について片方が無知な場合はいつでもその契約は無効であるということである。さらに、契約が意図的なたくらみによって結ばれた場合は無効であることにもヴァイアーは触れている。いうまでもなく、意図的なたくらみとは悪魔の行いに他ならない²⁶。また、この契約は強制力と恐怖とに基づくものであることや、悪魔と魔女たちの意図は必ずしも一致していないことなどについても、学説類集を大いに参照しながら言及し、ヴァイアーは魔術が法的に不可能であること

²³ J.Weyer, *op.cit.*, vol.2, VI-16, p. 286.

²⁴ *ibid.*, vol.2, VI-1, p.208.

²⁵ ヴァイアーが『鉄槌』を仮想敵とみなしていたことは、平野氏によって明らかにされている(平野隆文, 前掲書, pp.160-161)。また、モラはヴァイアーを「『魔女たちへの鉄槌』において示された事柄に初めて反対した人物」とした(G.Mora, *op.cit.*, p.417)。

²⁶ *ibid.*, vol.2, VI-17, p.363.

を証明した。

16世紀の悪魔学者の中には、「悪魔との契約」はローマ法に基づいて理解されるべきではなく、平等な者同士の契約というより悪魔に対し忠誠を誓うという封建的隷属のようなものだとする14、15世紀の教皇の見解を根拠とした見解を述べる者もあったが、1550年から1600年の間に魔術に関して思索した裁判官たちは、ヴァイアーと同じローマ法の用語を用いていた²⁷。こうして契約の無効性を法学的に説明したヴァイアーは、神学の領域においても『鉄槌』の切り崩しにかかる。魔女が「最悪の異端であり背教者」²⁸としてとらえられていた点に関しても、彼は一石を投じているのだ。

ヴァイアーは第6の書の第8章のタイトルが示すとおり「魔女たちは異端に分類されるべきではない」と結論している。ヴァイアーによれば、「精神における誤りが異端を生み出すのではなく、意志のはなはだしい頑固さが異端を生み出すのだ」²⁹。1度や2度警告されても強情に継続して自分の狂信的な信仰に固執しないのであれば異端という名には値しないとヴァイアーは言う。魔女とされている哀れな女たちは、悪魔の眩惑に魅了され、自分たちがしようとしても絶対に不可能なことをしたと信じこんで告白しているだけだとヴァイアーは考え、彼女たちは異端者などではないとした。

ヴァイアーは、単なる自白を鵜呑みにすることを問題視し、異端審問は慎重に行われるべきだとも考えていた。まず、それぞれの犯罪が自供されたなら、それらを鋭く思慮深く調査しなければならない。また、魔女たちが起こしたとされるトラブルや災害が、本当にそのとおりののか、それらが自然によって引き起こされたのか確かめるべきである³⁰。要するに、悪魔によって完全に精神を損なわれている魔女たちは、実

²⁷ H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, p.247.

²⁸ 「魔女＝最悪の異端者」という方程式を作り上げたのは、当時魔女狩りのハンドブックとなっていた『魔女たちへの鉄槌』である。Henry Institoris et Jaques Sprenger, *Marteau des sorcières. Malleus Maleficarum*, 1486, (traduit du latin par Amand Danet), Paris, 1973 ; Grenoble, 1990(rééd), p.139.

²⁹ J.Weyer, *op.cit.*, vol.2,VI-8, pp.240-241.

³⁰ J.Weyer, *op.cit.*, vol.2, VI-10, pp.246-247. ヴァイアーは、魔女の告白のみを根拠に処罰することに反対し、「証拠は日中の太陽より明らかでなければならない」と述べる。そして、魔女の自白した犯罪がどのような手段でどのような物質や道具を用いて犯されたのか徹底的に調査すべきだとし、その際には医者に助言を求めるべきだとした。ヴァイアーは、医学的な事柄のみならず、魔術に関する事柄についても神学者より医者に助言を求めるべきだとしている。それゆえ、「彼が近代における最初の精神科医と見なされるのは当然のことだ」とモラは述べる(G. Mora, "On the 400th Anniversary of Johan Weyer's 'De Praestigiis Daemonum'", *The American Journal of Psychiatry*, 1963, November, p.420).

際には他人に対し何ら危害を加えることができないのだから、彼女たちは注意深く調査され、キリスト教の教えの下で悔悛させられるべきだとされた。

一方で、ヴァイアーは異端者への処罰に対しても寛容な態度を示している。異端者たちは、悪魔の教説を信奉する時、過ちにのみではなく自分自身への過信、根深い傲慢さ、執拗な頑固さにとらわれていて、他人の忠告に耳を貸そうとしない者たちであるが、しかしながら、過ちとその魂が誘惑されたことを告白した彼らには、教父たちの同意とキリスト教の寛容さにより赦しが与えられてきたとヴァイアーは述べる。そして、魔女への処遇を論じるにあたり、ヴァイアーはこの異端に対する処罰の寛容さを利用しようとする。キリスト教の信仰から逸脱した魔女に対しては、ヴァイアーは火刑ではなく異端者のために定められた罰を与えることを提案する。彼は「罪を犯したことを悔い改めた者は事実上罪をおかしていない」というセネカの言葉と「(主は)悔い改める者には、立ち帰る道を開く」(「シラ書」17:24)という聖書の言葉を引用し、悪魔に誘惑された後に悔い改めてキリスト教の神聖な教えの下に立ち返った魔女たちには、貧者への施しという罰金刑やその他裁量による罰が科されることがあるかもしれないが、その罰が死刑であってはならないと主張した³¹。さらに、三度もキリストを否認したペテロでさえ赦されているのではないかと繰り返し述べてもいる。

異端者と同じ範疇で魔女への処罰を説くという態度は、先の「魔女は異端者ではない」とした彼の主張と矛盾しているとも言えるが、魔女とは違って自分の意志により罪を犯した異端者でさえ悔い改めれば死刑を免れていたことにヴァイアーは目をつけたのだろう。悪魔による唆しに原因があるとはいえ、信仰から逸脱しているという魔女たちの罪を異端者と同じ信仰上の過ちという次元でとらえ、悔悛すれば赦されるべきだとヴァイアーは主張した。ここには、魔女への死刑を何としても回避しようとする彼の姿勢が表れているように思われる。

このように、信仰からの逸脱という魔女たちの罪に関しては悔悛とそれ相応の償いが必要であるとヴァイアーは説いているが、彼女たちの意志が悪しきことを考えることについては、罪はないと考えている。例えば、女たちがその性向から近隣住民やう

³¹ J.Weyer, *op.cit.*, vol.2, VI-13, p.316. この観点からすれば、ミデルフォートも述べるように、魔術師たちさえも悔悛すれば赦されるということが演繹され(H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, p.243), 彼が指摘するように結局のところ処罰するに値するのは実害をもたらす毒殺者だけであるということになるだろう。

らみのある相手をしてやろうと考えたことは、容易に想像できる。しかしながら、彼女たちがたとえこのような悪意を持っていたとしても、そのこと自体は問題とすべきことではない。なぜなら、いかなる行動も欠いた単なる悪意というものをローマ法は処罰の対象とはしていないからだ。よってヴァイアーは、魔女とされた女たちに非があるとしても、それは——悪魔によって引き起こされたにせよ、自身の邪悪さからにせよ——無害なものだと考えていた。もちろん、悪しき意図から毒などを用いることによって人を殺したりすれば毒殺者として厳罰を受けることになるのだが³²。

さらに、いかなる悪しき意図をもってしても、人間の能力を超えた企てようにも不可能な犯罪というものがある。たとえば、物理的に土地などの不動産を盗もうと企むのは奇抜でばかげたことである。実際、不可能な目的を持ったりそれを試みたりしようとする者は狂っていると言われるに違いない³³。ヴァイアーにとって、魔女がまさにこれであった。彼が問題としたのは魔女の悪意ではなく彼女たちの狂気である。彼の論敵たちは魔女と悪魔の契約やサバト、嬰兒殺しや動物への変身などに関する自白に彼女たちの悪意を見たが、これらの事柄はヴァイアーにとっては精神の異常を示す証拠に他ならなかったのだ。それゆえ、彼女たちには「精神錯乱者は自身の精神錯乱によって罰される」*Furiosus furore suo punitur*という法律が適応されるべきだとヴァイアーは訴えた³⁴。そしてこの狂気の原因が黒胆汁、すなわちメランコリーにあるとヴァイアーは考えていた。

2 エラストゥスとの論争

2.1 エラストゥスと「第1の対話」

トマス・エラストゥスは、卓越した医者であり、著名なプロテスタントの神学者である。彼はスイスのバーデンに生まれ、バーゼル大学で学び、その後、ポローニャ大学、パドヴァ大学で哲学と医学を修めた。彼は1533年にはヘンネベルクの宮廷の主治医となり、その後1558年にはオットー・ハインリッヒ伯に仕えるかたわら、ハイデルベルク大学で医学を教えていた³⁵。

³² J.Weyer, *op.cit.*, vol.2, VI-26, pp.344-347.

³³ H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, p.246.

³⁴ J.Weyer, *op.cit.*, vol.2, VI-27, p.369.

³⁵ 彼の生涯と著作については以下を参照。A.Chalmers(revised and enlarged by), *The general Biographical Dictionary*, 1814, vol.XIII, pp.278-280. *The New Encyclopædia Britannica* 15th edition.

エラストゥスの「第2の対話」の始めに添えられたバーゼルの評議員たちへの挨拶の辞における記述から、2つめの対話は1578年に完成したものであることがわかる³⁶。本書では、魔女狩りを推進しようとする著者エラストゥスと、ヴァイアーの立場を代弁し、魔女狩りに懐疑的な意見を述べるフルニウスという人物の対話により、魔女をめぐる諸々の議論が展開されている。魔女狩りや悪魔学関連の書物においても言及されることが稀な本書の内容について、以下に簡単に紹介しておくことにする。

「第1の対話」の基本路線は、ヴァイアーの最大の論敵であったジャン・ボダンの見解とほぼ重なり合っていると見てよいだろう³⁷。まず始めに、エラストゥスは「悪魔と明らかにはっきりとした契約を結ぶ魔術師たちのなかに、彼女ら（魔女たち）を含める」³⁸と宣言する。これに対しフルニウスは、書物から多くの知識を得て、呪文や祈祷などさまざまな術を用いる魔術師たちと、無学で書物を持たず、呪文を用いるとしても前者のものとはまったく異なるものを用いる魔女たちとのあいだには大きな違いがあるのではないかと反論する。これに対しても、エラストゥスは、魔女たちは悪魔の助力の下でさまざまな悪事を働くことができると答え、さらにそのような彼女たちに聖書（「出エジプト」22:17）も死刑を命じていると主張する。フルニウスは、あわれなメランコリーにかかった無知な女たちは想像上で他人を傷つけたと思い込んでいるだけで、実際には何の危害も加えることができないのであるから、本物の魔術師と毒殺者とは同じ範疇にないのではないかと懐疑を示す。さらに彼は、魔女たちの想像力は歪められており、その考えは雑多に混乱している、思い違いをしている

vol.4, Encyclopædia Britannica Inc., 1993, p.536. 彼の名を冠した「エラストゥス主義」Erastianism は一言で言えば、国家権力が教会に優先するという説である。彼の主張は、キリスト教徒の罪は教会が秘跡を付与しないことによってではなく、国家によって処罰されるべきだというものであったが、この見解が普遍化されて、いくぶん拡大解釈されたものである。また、エラストゥスは反パラケルススの学者の1人としても知られている。エラストゥスに関しては、D・P・ウォーカー、前掲書、pp.183-195も参照。

³⁶ Thomas Erastus, *Deux dialogues. Touchant le pouvoir des sorcieres : et de la punition qu'elles meritent*, dans J.Weyer, *op.cit.*, p.435.

³⁷ 近代的主権概念を確立した『国家論』で名高いジャン・ボダンは、『妖術師の悪魔的狂気』という魔女狩りを促進するための著作も残している。『悪魔的狂気』の補遺は、「ヨハン・ヴァイアーへの反駁」である。ボダンは「魔女」*sorcirère*と高等魔術師*magicien*をひとくくりにして扱い、彼らが自由意志により悪魔と契約して実際に悪事を働いていると主張し、さらにはメランコリーという概念を持ち出して、魔女たちを逃そうとしているとして、ヴァイアー自身のことも妖術師であると非難してさえいる。De la démonomanie des sorciers, Paris, Jacques du Puys, 1580(réédition de 1587), Paris, Gutenberg Reprints, 1979.

³⁸ T.Erastus,*op.cit.*, p.403.

し、他人もそのように欺かれているとして、このような女たちについて聖書に記述はないし、キリストや使徒たちが魔女たちに呪いをかけられた者たちを癒したことなどもないのではないかと詰め寄る。これに対し、エラストゥスは、「彼女たちが奇跡を起こすことができないことは真実であるが、それゆえ君が彼女たちを罰するべきではないというのは間違っている」とはぐらかし、モーゼは邪悪な者たちMalefiquesに死刑を命じているのではないかと話の方向を変える³⁹。エラストゥスは、悪魔を唆しているから魔女たちは邪悪な者たちと呼ばれるのにふさわしく、「悪霊との明白な、あるいは暗黙の契約によって魔女は死刑に値する」と述べる。そして魔女たちは悪魔の道具ではないのではないかというフルニウスの問いにも、エラストゥスは、彼女らはただの道具であるだけでなく、理性を用いた首謀者であると答える。

魔女と魔術師を同質とみなすべきかという点は、この対話の中で非常に重要な議論であり、繰り返して現れる。「自分には魔女たちが呪術者や魔術師や占い師の類よりも邪悪であるとは思えない」とフルニウスはいう。これに対し、魔女たちは「魔術師たちのように儀式で悪魔を呼び出しているのではなく、卑劣かつ不可思議な行為によって神を否定し、悪魔へ身も心も捧げている。この同盟関係によってたえず悪事を働いている魔女たちのしわざを魔術師たちの術より無害だとみなすことは果たして賢明なことだろうか」とエラストゥスは答える。彼は、無学な魔女たちは本からではなくサタン自身の口から直接技法を学んでいると述べ、契約の下でサタンの力が働くという点では、魔術師と魔女は同じであるとし、むしろ魔女のほうにサタンの力がより強く反映されているとした。そして「彼女らの意志と努力*volonté et effort*を考慮するなら、他の呪術者たちよりもっと邪悪である」⁴⁰とエラストゥスは断言する。

次にフルニウスは、ヴァイアーの見解に従い、悪魔にとりつかれ、想像力が損なわれて狂っている魔女たちは、悪魔憑き、メランコリックな人々、その他の良識を剥奪された者たちと同様に罰されるべきではないのではないかと問う⁴¹。これに対し、エ

³⁹ *ibid.*, p.411

⁴⁰ *ibid.*, p.422.

⁴¹ 刑罰における責任の問題の歴史を扱った論文としては、以下がある。D.Bouley, C.Massoubre, C.Serre, F. Lange, L.Chazot, J.Pellet, "Les fondements historiques de la responsabilité pénale", *Annales. Médico Psychologiques*, 2002, pp.396-405. J.-L.Senon, C.Manzanera, "Réflexion sur les fondements du débat et critiques actuels sur l'expertise psychiatrique pénal", *ibid.*, 2006, pp.818-827. ヴァイアーに関して「彼は魔女たちが病気の状態にあると主張し、異端審問所の裁判を強く非難し、彼女らの精神の障害に釣り合った治療を奨励した。妖術に医学的方法を適用するとい

ラストゥスは、魔女たちは企みの前後でそれがどのような妖術であるかをよく知っており、健全な理解力をもってことにあたっているとす。そして、神を棄て悪魔に仕えることが悪いことだとも知っているの、それを隠しているのだと述べた。フルニウスは悪魔と魔女の契約は幻覚にすぎないのではないかと、とも問う。これに対してエラストゥスは、サバトの宴会が実際に行われていると主張し、その他にも証拠はたくさんあると述べ、契約が幻覚に違いないとする考えを否定している。エラストゥスは、裁判を慎重に進めなければならないという点に関しては賛意を示すが、女性の性の弱さを理由に彼女らを寛大に扱うべきかという点に関しては、エラストゥスは「神はそのようなことを要求していない」としてこれを斥けている⁴²。

2.2 ヴァイアーからの反論と「第2の対話」

「第1の対話」が出版されたあと、ヴァイアーはエラストゥスに彼の意見に対する反論の手紙を個人的に送っている⁴³。この反論に答えるかたちで著されたのが「第2の対話」である。今回用いたテキストの翻訳者であるグラールは、それぞれの立場から言われていることを考慮することで真実がより知られるようにと、ヴァイアーの書物の重要な点を要約したものを「第2の対話」の前に収録している。この「第1の対話への反論」は、エラストゥスに対する反論であるが、エラストゥスの主張は以下の6項目に要約される。①魔女たちは「出エジプト記」の第22章で示されている神の法に含まれるということ。そこでははっきりとした言葉で「魔女を生かしておくべからず」と言っている。②魔女は神を棄て、悪魔と同盟を結びこれを崇拜していること。③魔女たちは殺人者であるということ。④魔女たちは汚らわしい霊たちと一緒にいて、それらと宴会をするということ。⑤魔女たちは他の人々をいとわしい彼女らのセクトにおびきよせること。⑥魔女たちは極悪非道かつ非合法の術を常習的に行うということ。

これら6項目の主張に対するヴァイアー側からの反論は、①魔術師の罪は重罪であ

うこの方法は、当時の伝統的な思考と激しく衝突した」と紹介されている(*ibid.*, p.402).

⁴² T.Erastus, *op.cit.*, p.429.

⁴³ *ibid.*, pp.434-437. エラストゥスの「評議員たちへの挨拶の辞」とグラールの「読者への案内」の中で「可哀相な魔女たちに対する哀れみに胸を打たれた博学な人物」から反論があったことが記されている。名前は伏せられているが、前後関係からもこの人物がヴァイアーであることは明らかである。

り死刑に値するが、魔女たちは魔術師ではない。魔女たちは悪魔の幻覚 *illusion* にとらわれているだけ。②目撃したわけでも信頼のおける証言があるわけではなく、すべては悪魔的幻覚である。③魔女たちが用いるのは無害なものであり、彼女たちは殺人などできない。④悪魔のまやかし *imposture* によるもので、これらは幻覚である。⑤魔女たちの想像力は損なわれているので、他の人々を誘惑することなどできない。⑥魔女たちは無学で無分別であり、いかなる術も行うことはできない。彼女たちにあるのは悪魔による不可思議な幻覚により損なわれた想像だけである。

この反論を受けて書かれた「第2の対話」で、まずエラストゥスは「魔女＝魔術師」だと強調し、魔女たちを「神と真の宗教を棄て明らかな表明された契約の方法で悪魔に身を捧げた者たち」と定義している。以下、「第1の対話」と同じ姿勢で、すなわち魔女たちが悪魔との共謀によりかすかすの不思議な行為や悪行を実際に行っていると説かれる。ヴァイアーの拠り所とした魔女がメランコリックな人々であるという点に関しても、反駁が加えられる。この点に関しては、次章で詳しく取り上げることにする。

「第2の対話」は「第1の対話」の内容をやや詳しくした繰り返しであると言えるのだが、注目すべき観点があらたに盛り込まれている。エラストゥスは、神を棄て悪魔の側についた魔女たちが、同様の悪に他の人々を引き入れようとしていることは明らかだと述べたあとで、「もし彼女らを放置するならば、都市が危機に瀕する」⁴⁴と懸念を示す。また、「厳しい罰があることで人は悪いことをしなくなる」という言葉からも、エラストゥスの視野が社会全体に広がっていることがわかる。娘たちが母親たちによって魔女の道に誘惑されると述べていることから、同時代の悪魔学者たちと同様に社会の下部構造である家が魔女という害悪に汚染されていると感じていたことがうかがえる⁴⁵。後に「エラストゥス主義」（教会的諸問題の処理における国家の支配権を主張する思想）として発展させられた彼の思想の一端をここに垣間見ることができよう。

⁴⁴ *ibid.*, p.494.

⁴⁵ この点はセアールが指摘している。J.Céard, “Médecine et Démonologie. Les enjeux d’un débat”, *Diable, Diables, Diableries au temps de Renaissance*, Paris, Jean Touzot, 1988, 110. ボダンにおける同様の危機意識に関しては、以下を参照。拙稿「ジャン・ボダンにおける家と国家——『国家論』から『悪魔的狂気』へ」, 『中世思想研究』49 (2007), pp.129-143.

3 魔女はメランコリックか？

3.1 ヴァイアーの魔女解釈

ヴァイアーは、魔女について以下のように記述している。「悪魔との誤った、あるいは想像上の契約をし、想念、呪いあるいは馬鹿げていて不適切な物によってすべての悪事をもたらし、志していると見なされている者たちのことを私は魔女と呼ぶ。これは自分自身の意志と選択、すなわち生来の性向によるか、悪しき霊に後押しされ、助けられることによる」。そして、すべての悪事というのは「空中に見慣れぬ雷を燃やしたり、すさまじい雷鳴を引き起こしたり、豊富な穀物に損害を与えたり、違う場所にそれらを移したり、超自然的な病気を人間や動物にもたらしそれを治したり、遠くの場所に瞬時に移動したり、悪魔とダンスをし、宴会をしたり、悪夢を引き起こしたり、人間を動物に変身させたり、無数の途方もなく馬鹿げたことを示したりすることである」⁴⁶。

まず初めに、指摘しておきたいことがひとつある。ヴァイアーは「自分自身の意志と選択、すなわち生来の性向によるか、悪しき霊に後押しされ、助けられることによる」と書いているが、後で見るように、彼は魔女たちの無罪を主張する際には、「魔女たちの精神における過ちと意志のなさ、本性からの病気によるものであり、彼女たちはどのようなことも正しく理解したり判断したりできないので、選択し、自由意志によりこの選択に従うということなどなおさら不可能だ」⁴⁷と述べるのである。このような矛盾やあいまいさは他にも散見されるのだがヴァイアーの議論の傷となっており、のちにボダンから厳しく追及されることになった⁴⁸。

次に、定義にある「悪魔との誤った、あるいは想像上の契約」に着目しておきたい。第3の書の第3章「悪魔との契約の無効性について」がこの点に関しては詳しいのであるが、それは以下のように要約できる。ヴァイアーによると、魔女が悪魔と結ぶ契約は「からの契約」（すなわち無効）であり、これは何らかの幻 *fantosme* や想像 *imagination*、あるいは悪魔が架空の身体を用いてなした欺瞞でしかない。サタンは、

⁴⁶ J.Weyer, *op.cit.*, vol.1, III-1, p.276.

⁴⁷ *ibid.*, vol.2, VI-27, pp.366-367.

⁴⁸ ヴァイアーの一貫性のない言論とそれに対するボダンからの攻撃に関しては、平野隆文、前掲書、pp. 235-237で論じられている。おそらくこのような事態は、アングロが指摘しているように、ヴァイアーの中に観察とそれに基づく議論のシステムが確立されていなかったために生じているのだろう。例えば、ヴァイアーは狼化現象に関して、これを病人の狂った幻覚だとしながらも、あるいはこれらの狼は悪魔自身であると考えねばならないとも述べている。S.Anglo, *op.cit.*, p.213.

正常な体液のバランスや精神を混乱させることによって巧妙に視神経に影響を及ぼし、また、口笛を吹くようにさえずったりささやいたりすることで聴覚神経に働きかけ、幻覚を引き起こしている。魔女たちに帰されている諸々の悪行は——彼女たちは告白さえしているが——、サタンによって損なわれた想像力の産物でしかなく、これらすべては彼女たちが行っているのではなく、悪魔に由来するのである⁴⁹。

このように、巧妙に策略をめぐらす悪魔は、特に女性に強い影響を及ぼす。ヴァイアーは、女性が「気まぐれで、信仰心が薄く、悪意があり、忍耐力がなく、メランコリックである」と述べる⁵⁰。そしてとりわけ、愚かで疲れきった情緒不安定な老婆たちが悪魔の誘惑の餌食となっているとした。ひ弱な女たちにあっては、想像力に関わる諸器官が腐敗しており、彼女らの目は閉ざされている。これらのことは、メランコリックな人々の思考や言葉や幻覚や行動に注目すると容易に理解されるとヴァイアーは述べる。彼らの感覚はすべて黒胆汁の体液によって損なわれ、黒胆汁が神経の中に発散されることにより彼らの精神は激しく襲われるので、彼らの中には自分が物言えぬ動物だと考える者もいて、動物の鳴き声や動作をまねる⁵¹。悪魔はまやかす幻覚をつくりだすための最も適した物質として、黒胆汁の蒸気を好んでいる⁵²。彼はこの中

⁴⁹ *ibid.*, vol.1, III-3, pp.285-286.

⁵⁰ *ibid.*, vol.1, III-6, p.300. この引用箇所につき、そのため創世の時に悪魔がアダムよりイヴをふさわしい説得の道具として選んだことについて触れられ、さらにプラトン、アリストテレス、および教父たちの「女性蔑視」の言説が列挙されている。なお、ルネサンス期のエリート層における女性観については、J・ドリュモア、前掲書、pp.567-636が詳しい。実際の処罰にあたっては、ヴァイアーは女性たちの精神の弱さと生来の性質を考慮して、他の条件が同じ場合、女性は男性より重く罰されるべきではないと述べる（J.Weyer, *op.cit.*, VI-22, pp.313-315. ウェルギリウス『アエネーイス』の第2巻、583-584行、アリストテレス『問題集』29.11などが根拠とされる）。

⁵¹ J.Weyer, *op.cit.*, vol.1, III-7, pp.303-304. またこの章では、ヴァイアーの豊富な臨床体験を垣間見ることができる。自分が土製の器だと思ひ込み、壊されるのを怖れてすれ違う者の前から退く者たち、死を恐れながらもしばしば自殺を図る者たち、自分が犯罪者だと思ひ込み近づいてくる者たちに怯える者たち、自分が全世界の独裁者であり皇帝であると考えている男などについての興味深い症例が列挙されている。

⁵² 悪魔がメランコリーに侵された身体を偏愛することには、『魔術研究』（1599年）の著者デル・リオらも同意している（J.Céard, “Folie et démonologie au XI^e siècle”, *Folie et déraison à la Renaissance*, 1976, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles, 137). 中世を通じてメランコリーは七罪源のひとつである怠惰アケディアと互いに重なったものとして理解され、両者の結びつきからサタンが人を罪に誘うため身体の弱さにつけこむという発想が生まれた（J.ドリュモア『罪と恐れ』佐野泰雄・江花輝昭・久保田勝一・江口修・寺迫正廣訳、新評論、2004年、p.350）。この点に関しては以下も参照。A.W.Jackson, “Acedia the Sin and its relationship to sorrow and melancholia in medieval times”, *Bulletin of the History of Medicine*, 1981, vol.55, no.2, 172-185. Y.Hersant, “L'acédie et des enfants”, *Mélancolie*, sous la direction de J.Clair, Paris, Gallimard, 2005,

に自らを滑り込ませ、無数の幻覚を形成する。悪魔は神の許しの下で、これらの幻覚を人間の魂に刻印する力を発揮し、そのため人間がしばしば自分がかばんに入れられた騾馬であるとか、飛んでいる鷲だとか考えるようなことが起こる。また、ディアナや彼女の妖精たちあるいは仲間の愚かな女たちといろいろな場所へ運ばれて、ダンスに加わり遠くを旅し、その他狂気的なことをしたと考えるというようなことが起こるとヴァイアーは言う。そして、悪魔は、女性たちあるいは精神病に苦しんでいる人々に対し、彼等をよろこばせるようなさまざまなかたちで欺瞞を弄し、魅惑しているとされた。

『悪魔の欺瞞』において「私は見た」、「私は知っている」というヴァイアー自身の直接の経験であることを示す表現が頻出することが顕著に示すように、これらの考察は彼の臨床体験から導かれたものであった。ヴァイアーは、メランコリー以外にも今日においては精神分裂症、カタレプシー、パラノイアと名づけられている各々の症状に関しても臨床の記録を残している。中世を通じて神学者や聖職者の手に委ねられていた精神の病という領域に世俗の医師たちが進出していったのは、まさにルネサンス期のことである。その際、彼らの最大の武器となったのがこのような具体的観察と記録という手法であった。

3.2 魔女＝メランコリー説への批判

魔女をメランコリックな人々であるとするヴァイアーの見解に対し、エラストゥスは以下のように反論している。悪魔との契約や、その契約のおかげで可能となるさまざまな悪行は、メランコリックな老婆による単なる空想などではないとエラストゥスは主張する。その根拠としては、若者や壮年の者たちも、そして男性たちもこの病を患うことがあること、魔女たちは他の事に関しては思慮深く、自分たちが魔術という罪深く悪い行いをしていることを承知の上で、他の者たちにもそれを教えていることを挙げる⁵³。また、エラストゥスは、魔女たちが十分に分別をわきまえており、他の人々よりも愚かでも間違いじみているわけでもないと主張する。さらに、もし彼女たちがメランコリックであるなら、さまざまな場所で捕らえられたにもかかわらず、長年にわたり魔女たちがサバトや悪魔との性的交わりについて同じことを告白する事態

pp.54-59.

⁵³ T.Erastus, *op.cit.*, p.477.

がどうして生じているのか、と述べる。そして、2人のメランコリックな女たちがまったく同じ想像をすることは決してありえないのだから、魔女たちがメランコリーに捕われその体液にすっかり満たされていると思込むことは、はなはだしい間違いだとエラストゥスは断言した。

次に、注目しておきたい点なのだが、もし魔女たちがメランコリーの激昂にとらわれたなら、彼女たちは大きな喜びをもって、自分たちの知識や脅威を行う力について、皆に語るだろうとエラストゥスは言う⁵⁴。大まかに把握すると、メランコリーが引き起こす現象には2つの極がある。精神錯乱、あるいは狂気の状態というのはそのうちの1つの状態を示している。すなわち、躁鬱の「躁」の状態の方である。そしてもう1つは悲しみや鬱屈という「鬱」の状態である⁵⁵。さらに「躁」の状態も、アリストテレスの天才やプラトンの神的な狂躁のような場合と狂人や愚者の熱狂のようなものの双方を含む。もっとも「馬鹿と天才は紙一重」という言葉がいみじくも表現しているように、両者の境界は曖昧なものであるとも言えるのだが。ここでエラストゥスが言っている「激昂」は狂気にとらわれ様々なことをわめきちらす狂人的な状態、つまり躁の状態を指すと考えられる。メランコリックな人々を悪魔憑き（極度に興奮し、ひどく苦しんでいる、とエラストゥスは記す）と気の狂った人々と並置していることから⁵⁶、エラストゥスはメランコリーの引き起こす症状を躁的に常軌を逸した状態と捉えていたと考えられる。

ヴァイアーに論駁を加える際に、ジャン・ボダンも魔女がメランコリックな人々であるとする見解を批判していた。ボダンは、魔女たちの病気がメランコリーに由来するということが馬鹿げていると述べる。ガレノスが言うように、メランコリーから生じる病気は常に危険なものであるのに、自分が裁判で見聞きしている魔女たちは40年も50年も魔女として悪行をなしているのではないかとボダンは主張した。また、ボダンはアリストテレスを典拠に、中庸を得たメランコリー気質のすばらしい影響は、古代の哲学者や医者すべてが述べているように、人間を賢明にし、思慮深くするので、

⁵⁴ *ibid.*, pp.536-537.

⁵⁵ アキスカル両氏の論文において、このメランコリーの2つ性質はデューラーの沈鬱な「メランコリア」とクラナッハの攻撃的な「メランコリア」の対比から分析されている。H.S.Akiskal, K.K.Akiskal, "A mixed state core for melancholia: an exploration in history, art and clinical science", *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 2007, 115(Suppl.433), pp.44-49.

⁵⁶ T.Erastus, *op.cit.*, p.423.

メランコリーの美点は女性にはほとんど適さないとも断言した⁵⁷。ボダンによれば、女性の体液は本質的に冷たく湿っており、過度の熱と乾きから生じる焼け焦げたメランコリーとまったく異なる。また、メランコリーの病は熱く乾いた気質の男が熱く乾いた地域で夏にかかるものであるはずなのに、北方のドイツやアルプス、サヴォワの山岳部に魔女がたくさんいることにはヴァイアー自身も同意しているのではないかとボダンは言う。さらに、これら北方の人々は陽気でおしゃべりであり、メランコリーの気質とはまったく逆であるともボダンは述べた。

魔女たちのメランコリーに関してのヴァイアーの主張と、それに対する反論からは、ルネサンス期におけるメランコリー概念の複雑さ⁵⁸が窺い知れる。結論を先取りして述べると、その複雑さゆえに、メランコリーという概念はヴァイアーにとって諸刃の剣となってしまったとも言える。

メランコリーに関して最初に論じたのはヒポクラテスであり、その後メランコリーは、様々な意味を付与された幅広い概念となるにいたった。メランコリーは、ルネサンス期においては 体質と病気を表す名前として区別されて使用されていたが、どちらの場合にも同じ「憂鬱」*melancholique*という形容詞が用いられているため、人々のイメージの中では結びつけて考えられていた⁵⁹。このことを念頭に置いた上で、あえて単純化するならば以下のようなになるだろう。病としてのメランコリーは、元来「黒胆汁液」の過度の増加や不適當な変質に起因するものとされ、時代が下ると黄胆汁の、さらにアヴィケンナ以後は他の体液のいずれかの「燃焼」によって起こると考えられた。この病気の範囲は、恐怖や人間嫌い、鬱状態、さらには狂気にまでわたる異常な精神の徴候に及ぶ。気質としてのメランコリーは二様に解釈され、1 つはアリストテレスの『問題集』(XXX-1) に記されたような偉人や天才を作り出す熱い黒胆汁気質

⁵⁷ J.Bodin, *op.cit.*, p.247R.

⁵⁸ メランコリーの歴史に関しては以下の研究がある。R.クリバンスキー, A.パノフスキー, F.ザクスル『土星とメランコリー』, 晶文社, 1991年。(原著の出版は1964年。) G.Minois, *Histoire du mal de vivre*, Paris, Éditions de la Martinière, 2003.

Y.Hersant, *Mélancolies*, Paris, Éditions Robert Laffont, 2005.

P.Dandrey, *Anthologie de l'humeur noire*, Paris, Éditions Gallimard, 2005.

J.Claire(sous la direction de), *Mélancolie*, Paris, Éditions Gallimard, 2005.

なお、ルネサンス期におけるメランコリーについては、J.ドリュモエ『罪と恐れ』, pp.330-361 が詳しい。

⁵⁹ M.Aスクリーチ『モンテーニュとメランコリー』 荒木昭太郎訳, みすず書房, 1996年, p.53.

R.クリバンスキー, A.パノフスキー, F.ザクスル, 前掲書, pp.30-31.

であり、もう1つはガレノス以来体系化された4タイプのうちの1つである邪悪な性質（陰気、軽率、臆病、強欲）をもった冷たい黒胆汁気質である⁶⁰。

ヴァイアーは女性たちをメランコリーの気質を持つゆえに、悪魔の格好の餌食となっているとし、悪魔の欺瞞によって眩惑されているだけの彼女たちが行ったと主張する悪事は空想のものでしかないとした。ここでヴァイアーが想定しているメランコリー気質は、明らかに冷たい黒胆汁気質だといえる。そのような気質をもった女性たちが、メランコリーの病にかかりやすいのは明白である。さらに悪魔は彼女たちの体液をかき混ぜたりすることで、この病を生じさせる。よって、魔女たちの精神における過ちと意志のなさは、本性からの病気によるものであり、彼女たちはどのようなことも正しく理解したり判断したりできないので、選択し、自由意志によりこの選択に従うということなどなおさら不可能だとヴァイアーは訴えた。つまり、彼は魔女たちが心神喪失者であると主張したのだった。これに対して、エラストゥスは彼女たちがメランコリックな人々ではなく、思慮分別をもち、自らの意思で悪魔と契約していると述べた。テキストを読む限りでは、エラストゥスがメランコリーを病気としてとらえているのか、あるいは気質としてとらえているのかの判断は難しいのであるが、彼はメランコリーの状態を躁的な狂乱としてとらえていたことは確かである。ボダンにおける病としてのメランコリーも、エラストゥスの述べたものと同種のものだと言える。彼が危険なものであると見なしたのは、焼け焦げた熱い黒胆汁であった。気質としてのメランコリーに関しては、ボダンは熱い黒胆汁気質と、冷たい黒胆汁気質の双方を認識していた。ボダンは、天才たちを生み出す熱い黒胆汁気質も、陰鬱で暗く冷たい黒胆汁気質も女性にはあてはまらないとしたのだった。ボダンは病としても気質としてもメランコリーは女性には関係ないものだと主張することにより、ヴァイアーの魔女たちがメランコリックな人々であるとする見解を一蹴したのだった。

おわりに

16、17世紀に魔術や悪魔に関する議論が盛んだったことについては、今でも当時の

⁶⁰ 後者の黒胆汁気質は、「痩せて陰気で、そのうえ不恰好でむさ苦しく、無味乾燥で無気力、臆病で横柄、もの憂げで怠惰——要するに宗教も法も眼中になく、人間関係に対する配慮もない人間たちである。黒胆汁気質の象徴は、地べたに寝ている老守銭奴であるというところであろう」とI.P.クリアーノは書いているが、ヴァイアーの目に映っていた魔女たちの姿はまさにこのようなものだったに違いない。I.P.クリアーノ『ルネサンスのエロスと魔術』桂芳樹訳、工作社、1991年、p.87.

一般的な文化、特に科学的な達成と矛盾しているとする見方がある。しかしながら、悪魔学の議論は「ルネサンス期の光」と隔絶されたものでない。科学と悪魔学は一見相容れない領域のように思われるが、この対立は見かけ上のものに過ぎない⁶¹。両者とも自然（神と自然という区分における）現象を説明するためのアプローチという点では同じベクトルを向いている。F・ベーコンは、『学問の増進』において、魔法の語りや呪いや占いの観察と熟慮からは被告人に対する正しい裁きのためのみならず、自然の秘密を更に開示するためにも役に立つ光が得られるだろうと述べた⁶²。悪魔学は当時において科学的議論の媒体の役割りを果たすものであった。

ヴァイアーは医者としての臨床体験を活かし、魔法とされている女性たちはメランコリーに侵され悪魔にだまされているだけで、実際に悪事など働いていないと主張した。我々現代人の目から見れば、魔法の問題に医学的議論を持ち込み、「犯罪の医療化」（犯罪者を処罰するよりも治療すべきであるという発想）⁶³への扉を開く彼の主張は、当時日の目を見ることはなく、逆にエラストゥスやボダンらからの手厳しい反駁を惹起することとなった。ヴァイアーの最大の弱点は、悪魔の力や悪魔と契約し悪行を行う魔術師がいることを認めてしまっている点にあり、R・スコット（c.1538–1599）がしたように、霊や悪魔により魔術がおこる可能性を否定するという前提があつてこそ、ヴァイアーのメランコリー理論は効力を発揮するものとなったであろう⁶⁴。

しかし、この矛盾にこそヴァイアーの生きた時代の精神が反映されているように思われる。当時の知識人における自然と超自然の境界は、今日のわれわれの意識におけるそれとは著しく異なっている⁶⁵。実験やそれに基づく理論に裏打ちされた目に見えるものを信じるというのが今日的な合理的精神というものであろうが、当時における合理的精神とは、「自然の中にはまだ知られていないものがあり、超自然のものである

⁶¹ S.Clark, "The scientific status of demonology", *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance*, ed.N.Vickers, Cambridge, Cambridge University Press, 1984, p.352.

⁶² F.Bacon, *De augmentis scientiarum*, bk.II, c.2, in *The Works of Francis Bacon*, ed.J.Spedding, R.L.Ellis, and D.D.Heath, 14 vol.1864, republished in 1976, London, p.192

⁶³ P.ダルモン『医者と殺人者』鈴木秀治訳、新評論、1992年、pp.4-5.

⁶⁴ S.Anglo, *op.cit.*, p.222.

⁶⁵ L.Febvre, "Sorcellerie : sotisse ou révolution mental", *Annales E.S.C.*, 1948, 9-15.

フェーヴルの以下の著作も16世紀の人々の心性に関して示唆に富む。L.フェーヴル『ラブレーの宗教』高橋薫訳、法政大学出版局、2003年、pp.525-533。（原著の出版は1942年。）

霊や悪魔に関してはなおさら理解不可能なものがある」⁶⁶というボダンの言葉が示すように、「可能」に無限の広がりをもつことを認めるものだった。ヴァイアーはメランコリーという概念を用いて、悪魔の領域から魔女とされていた女性たちを救おうとしたが、当時におけるメランコリー概念の複雑さはそれを阻んだ。さらに根源的な問題として、ヴァイアーが悪魔の巨大な力を認めるという前提に立っていたため、彼の理論はうまく機能しなかったのだといえよう。

しかしながら、ヴァイアーの議論は、16世紀の精神異常者に対する寛容を説く理論の中にも反映されることになった。例えば、魔女狩りを推進しようとしたペーター・ビンスフィールド（1540–1603）は、魔女たちを必然的に気が狂った者たちだとするヴァイアーの主張を否定したが、常軌を逸した精神薄弱の女性たちに対しては寛容な処罰を説いた。また、ヴィッテンベルク大学の教授であった法学者ペーター・ハイク（1559–1599）は、子供を殺害した明らかにメランコリックな母親は追放刑という軽い罰に処されるべきだという見解を示した。インノケンティウス10世の侍医であり法医学の創設者とみなされるパオロ・ザッキア（1584–1659）は、医師のみが人間の責任能力について判断を下しうると考え、狂人おのをおのを医学的に鑑定し、できる限りの治療を与えるとともに彼らの罰を免除すべきだと主張した。彼はヴァイアーの説を参照しながら、悪魔憑きが実際に狂人であるかメランコリーな人々だと認めている⁶⁷。

このように、後世の精神異常者に対する擁護論の発展にヴァイアーは少なからず寄与した。と同時に、魔女たちを病人あるいは精神異常者とみなすことによって、ヴァイアーの説は17世紀末に彼らを狂人として施療院へ収容する方向性を示すものでもあったように思われる。この時代にいたると、魔術はもはや冒瀆を行う魔力のゆえに裁かれるのではなく、それがあらわにする非理性ゆえに裁かれるようになる⁶⁸。ヴァイアーの理論は、まさに冒瀆と病理の交差点上に位置していたのである。

⁶⁶ J.Bodin, *op.cit.*, Preface de l'Auteur.

⁶⁷ H.C.E. Midelfort, *op.cit.*, pp.250-260.

⁶⁸ M.フーコー『狂気の歴史』田村俣訳, 新潮社, 1975年, p.116.